

廣瀬健君のこと

村田 全

一九五九年というと、もう半世紀近くも前のことだが、今もありありと覚えている。当時、立教大学の数学教室は現在（四号館）とは別の建物（六号館）の一、二階を占めていて、玄関脇に大学院研究室があった。そこに一群の新三年生が集まってデデキントの『連続と無理数』を読んでいたが、その発頭人の一人が廣瀬君であった。僕は野次馬根性から顔を出し、「一つ原文で読んでみないか」と誘いを掛けた。数学科の数人に物理学科の三年生二人（小嶋昭（元三菱原子力株式会社）、菊池順（早稲田大教授））も加わって、とうとう夏休み前頃までには全員でドイツ語の原文を読み通した。そこまで来るとは思っていなかっただけに、こちらも乗ってきて、途中から

「数学的には『数とは何か、何であるべきか？（Was sind……）』の方が面白いし、ドイツ語はむしろやさしいから、済んだらこちらを読まないか」

とあふったところ秋口には実現して、終わった後は思い切って Gödel の「決定不能定理」の論文（Über formal unentscheidbare Sätze……）に挑んだ。さすがに最後まで付いてきたのは廣瀬君と故佐藤總夫君（元早稲田大教授）、ほか一人二人だったと記憶する。この論文は当時、僕自身も読んでいたので、結構、本気になっていた。廣瀬君はそれをよく覚えていてくれて、僕の定年の時に配って貰った小冊子に、

「(デデキントの本は) 当時は翻訳書がなく……その内容は『集合論の神話時代』といったもので、村田先生の御教示がなければ正確には読み切れなかつたろう」

などという一文を寄せて、僕を持ち上げてくれた。あの読書会のことは、四十年近い僕の教師生活の中でもひとときわ幸せな思い出である。

四年生になったとき、廣瀬君はあるいは僕に就くかと思っていたが、(この辺の記憶はおぼろながら) トポロジーをやると言ってその専門家(三瓶教授?)に就き、大学院では赤攝也せきせつやさんに就いて本格的に基礎論を始めた。僕は大魚を逸したような気になって少し寂しかったが、彼が大をなすにはその方が正解だと思つて、むしろ若い彼の見識、眼力に感心した。彼は赤せきさんの指導の下で修士論文を書いたが、その公聴会で、折から盛んになりつつあった「unsolvabilityのdegree」に関する彼の修士論文に接したときには、僕の期待が見事に実現したことを知つて嬉しかった。その後の彼の仕事については多くの人が語ってくれるであろう。

彼は秀才だったが、半面大変な野次馬であった。数学科一年生の頃から力学や電磁気学など、物理学科の単位をいくつか取つたようだが、それは学問上の本筋のこととしても、放射線管理士の資格その他、色々な資格を貪欲に取っていた。また高校時代から水泳指導員の資格も持っていたし、空手の有段者と聞いた覚えもある。こういう学生は得てして散漫になるものだが、彼は見事に基礎論の専門家として一家をなした。今にして思うと、数学ではわが

及ぶ所でなかったの感が深い。

そのことの一面として彼は友情に厚い人でもあった。呑み友達のこととは（佐藤總夫君がいないのが残念だが）その方面の知友に委ねる（ゆた）として、読書会の時にも落伍しかけた友人を励まして続けさせたし、またずっと後のことだが、僕に就いて基礎論をやった大学院生の相談にもよく乗ってくれた。あまり体を動かしたがない僕を誘って、家族づれで弗沢の滝に仲間と共に遊んだこともあり、彼らが御代田（みよた）の別荘地で過ごした夏休みの旅行に誘われて、家族で志賀高原に出かける途中二日ほど同行したこともある。これは僕が今信州に暮らしている切掛（きっか）けになった出来事で、もはや失われた四十何年前の、月見草咲く松林で車座（くるまざ）で話し合ったことなど、忘れがたい過去の一コマである。

彼は大分の出で、幕末の大儒、廣瀬淡窓につながると聞いたことがある。だとすれば、淡窓の名も健だから健君の名はそれを継いだのであろうか。彼が若年東都に遊学し、壮年は教育大からアメリカに研鑽し、それぞれ仕事でも遊びでも良き交友を持ち得たことを思うと、淡窓の有名な七言詩の起承

休道他郷多苦辛　　いうをやめよ他郷苦辛多しと

同袍有友自相親　　同袍友有り自（おの）から相親しむ

（同袍は同じどてらで暮らすような親しい関係）

は確かに健君の一面を伝えている。「後あり」と言うべきであろう。

惜しむらくは好漢、神に愛されることのやや深きに過ぎたか、夭折ようせつとは言えぬにしても、もう少し生きて仕事を続けてほしかった。早稲田大学で行われた葬儀せきの時、赤さんが

「ああ、天われをほろぼせり、天われをほろぼせり」

と天を仰いで嘆息したのを昨日のことのように思い出す。多少蛇足になるが、これは孔子が高弟顔淵の早世を嘆いた言葉で（「顔淵死 子曰 臆 天喪予 天喪予」、「論語」）、彼にとって廣瀬君は顔淵のような存在だったのかと、しみじみ思ったことである。

(二〇〇四年三月)

-
- 「広瀬健君のこと」(『広瀬健の思い出』。『広瀬健の思い出』刊行会、二〇〇五年四月。非売品) 所収。
 - 読みやすさのために、適宜振り仮名を追加した。
 - PDF化にはLATEX_{2 ϵ} でタイプセティングを行い、dvipdfmxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/science/science1ib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>